

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成27年10月19日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局 文学研究科

職 名 教授

氏 名 吉井秀夫

助成の種類	平成27年度・研究成果公開支援・国際会議開催助成		
事業内容	国際シンポジウム「世界考古学の現状と課題」		
開催期間	平成27年 9月19日 ～ 平成27年 9月19日		
開催場所	京都大学文学部第3講義室		
参加者	総数 80名	内訳	海外(5名) 国内(75名)
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会計報告	事業に要した経費総額	1,063,044 円	
	うち当財団からの助成額	1,000,000 円	
	その他の資金の出所	(機関や資金の名称)	参加費
	経費の内訳と助成金の使途について		
	費 目	金 額 (円)	財団助成充当額 (円)
	旅費	712,910	712,910
	謝金(講演者・通訳・学生補助)	256,724	250,462
	通信運搬費	13,628	13,628
印刷代	23,000	23,000	
懇親会費	56,782		
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 貴財団より助成を頂き、無事に国際シンポジウムを開催することができたことを感謝申し上げます。考古学の分野では、今回のような国際シンポジウム開催にあたって、国外からの報告者招聘費用を確保できるルートが限られており、本当に助かりました。		

成果の概要／吉井秀夫

1916年に京都帝国大学に日本で最初の考古学研究室が設立されてから約1世紀が経ち、日本考古学は大いに発展した。しかし、その研究成果の殆どは日本国内で発表されるのみであり、世界考古学の研究動向とは大きくかけ離れているのが実情である。2016年に、世界考古学会議(WAC)第8回大会を開催するための準備を、京都大学・同志社大学・立命館大学の考古学研究室関係者が合同で進める中、世界考古学の現状と課題を知ると共に、日本考古学におけるこれまでの学術的蓄積が、世界考古学にどのように貢献できるかを考えるために、本シンポジウムを企画した。

本シンポジウムにおいては、WAC執行部の溝口孝司会長(九州大学)、Anne Pyburn 副会長(Indiana University)、松田陽事務総長(当時 University of East Anglia、10月より東京大学)、Dru McGill 財務部長(North Carolina State University)、岡村勝行氏(大阪文化財研究所)に報告をお願いした。

Anne Pyburn 氏「The Revolution in Archaeology and the Future of Science」では、マヤ考古学とキルギスタン考古学での実例を通して、この20年間アメリカ合衆国の考古学者がジェンダー・先住民・ナショナリズムといった問題に直面し、どのように関わっていったかが報告された。

Dru McGill 「Archaeologists Across Borders: Expectations and Hopes for the Eighth World Archaeological Congress」では、世界20ヶ国の考古学者へのアンケート結果をもとに、日本考古学の研究成果の中で、先住民問題・文化遺産マネジメント・災害考古学・自然科学との共同研究などについて、大きな関心が持たれていることが報告された。

岡村勝行「The archaeology of disaster: how can Japanese archaeologists contribute to it?」では、東日本大震災での経験を踏まえ、災害痕跡の検討を通じた過去の災害の復元研究と災害後の考古学マネジメントを組み合わせることで、総合的な「災害の考古学」を国際的に提唱する可能性が提示された。

溝口孝司「Globalisation, Internationalization and the Future of Japanese Archaeology」では、日本考古学のアセンブリッジとしてとらえ、世界各地の考古学のアセンブリッジと比較検討することにより、その特質が明らかになると考え、言葉の壁を越えたグローバルなコミュニケーションが必要であることが報告された。

松田陽「Public archaeology in a globalizing world and the future of WAC」では、世界考古学の発展とパブリック・アーケオロジー研究の関係性が説明されると共に、英語を基本使用言語としておこなわれ、特定地域の研究者に参加者・報告者が偏る国際会議のもつ問題点が指摘された。

各報告の後には、フロアを交えて、世界考古学の問題点と日本考古学との関係についての質疑応答が行われた。中でも、各報告者から、日本考古学者が積極的に世界考古学に向けて、研究成果を発信することを期待する発言がされたことが印象的である。



総合討論の様子